目次

第一講　演習問題⑴ …… p. 2
第二講　演習問題⑵ …… p. 8
第三講　演習問題⑶ …… p. 14
第四講　演習問題⑷ …… p. 22

第一講　演習問題(1)

次の文章は、『露殿物語』の一節で、露殿とかの君（遊女）が対話する場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ある時かの君、起きもせず寝もせ[a]ぬさまにうちしほれ、こぼれかかる鬢(びん)のはづれに伝ふ御涙はつらぬく玉のごとくにて、霜をおみたる女郎花(をみなへし)、下葉(したば)しほるる風情にて、いかにもほれぼれとうちしほれてましませば、露殿見給ひて、「何とてさやうにうちむつけさせ[A]給ふぞや。何ぞ御心に入らぬ事ばし候か、それがしに御うらみばし候か、[1]何事にても御心置かれず御物語候へ。夢いささか御心にたがふ事候まじ」と[B]のたまへば、かの君涙をおし拭(のご)はせ給ひて、「御恥かしき事に候へども、この上は何をかつつみ候べし。妾(わらは)が父母は大坂にさぶらひ給ひ[b]しが、慶長の世の乱れに、父は君のために命を軽んじ給ひ、母上は筑紫とかやにてみまかり[C]給ひたれば、わらはみなし子となりて、かなたこなたと流浪し、人商人(ひとあきびと)の手に渡り、今この所に売られ来て、かやうに流れを立て候ぞや。壁に耳、岩の物いふ世のならひ、天知る地知るわれ知る人知るにて、そんぢやうそれが娘なるが、父母におくれ、せんかたなさに身を売りて、流れを立つるあさましやと、[2]世の嘲(あざけ)りの候。みづか

らはとても心は浮かれ女の、浮かれそめにし身にあれば、とてもかくてもあり[c]な[d]めど、草の陰なる父母の、浮き名を流すあさましさ、悲しさ面目なさは、いはん方なく候へば、あはれみづからを夜まぎれに盗みとりて、いづ方へも具し行き給はり候へかし。御身とだにも添ふならば、虎臥す野辺、鯨寄す浦、いかなる岩木のはざまなりとも、[3]など住み憂からん」と、かきくどき給ひて、宛転（ゑんてん）たる双眼より、御涙をはらはらとこぼし[D]給へば、露殿聞こしめし、「うれしくも承るものかな。かねがねさうは思ひ候ひ[e]つれども、[4]御心中いかがとためらひ候ひて、今まで遅なはり候。いざさらば[5]思ひたち給へ。しかも今宵は人音もせず、禿（かぶろ）・香車（きやうしや）もあたりに見えず、よき隙に候へば、いざさせ給へ」とて、とる物もとりあへず盗みて負ひて出で、武蔵野さいて落ち行き給ふ。

　暗さは暗し、行く先見えざれば、夜のほのぼのと明くるまで、武蔵野を迷ひ歩き給ふ。かくて夜も明け方に、主の男、「昨夜は[6]いつもの露殿とまり給ふが、いかで音し給はぬぞ」とて、行き見れば、女もなし。もとより露殿もゐ給はざりければ、「あなや」と思ひて、弓胡簶（ゆみやなぐひ）を負ひて追つかけけり。道行く人に、「かうかうのものは見ざるか」と問へば、「しかじか」といふ。「さらば」とて、武蔵野さいて追つかけ行くこそうたてけれ。

（『露殿物語』）

（注）
○鬢―頭の左右側面の髪。
○ほれぼれと―ぼんやりと。
○慶長の世の乱れ―慶長十九（一六一四）年の大坂冬の陣と、翌年の夏の陣。
○禿―遊女の雑用をする幼女。
○香車―遊女を監督し、雑事を仕切る老女。

問一　傍線1・6について、わかりやすく現代語訳しなさい。

1＝

6＝

問二　傍線2「世の嘲（あざけ）り」の対象となっていることは何か、三十字以内で説明しなさい。

問三　傍線3「など住み憂からん」と言ったかの君の心情について、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　あなたと一緒でも、不便な田舎暮らしはきっとつらいでしょう。
イ　あなたと一緒でも、逃げ続けるような旅の暮らしは不安です。
ウ　便利な町を離れての生活は、どれくらい大変なのか不安です。
エ　あなたと一緒に暮らせるなら、どんな場所でもつらくはありません。
オ　あなたと一緒に田舎で暮らせるなら、どれほど嬉しいことでしょう。

問四　傍線4「御心中いかがとためらひ候ひ」から読み取れる露殿の気持ちについて、三十字以内で説明しなさい。

問五　傍線5「思ひたち給へ」について、具体的に誰がどのような行動をとることか、十五字以内で説明しなさい。

問六 二重傍線a～eの助動詞について、終止形を示しなさい。また本文で使用されている活用形を次の中から選び、記号で答えなさい（同じ記号を複数回選んでもよい）。

ア 未然形　イ 連用形　ウ 終止形
エ 連体形　オ 已然形　カ 命令形

a＝　b＝　c＝
d＝　e＝

問七 波線A～Dの敬語について、その敬意の対象となっている人物を次の中から選び、記号で答えなさい（同じ記号を複数回選んでもよい）。

ア 露殿　イ かの君　ウ かの君の父
エ かの君の母　オ 人商人　カ 主の男

A＝　B＝
C＝　D＝

問八　作品と作者名を並べた次の①～④を参考にして、空欄A・Bに入る作者名を漢字で答えなさい。

① 好色五人女・世間胸算用― A

② 奥の細道・笈の小文―松尾芭蕉

③ 玉勝間・古事記伝― B

④ 浮世風呂・浮世床―式亭三馬

A＝

B＝

第二講　演習問題(2)

次の文章は、今様を好んだ後白河院が、今様の歌い手である傀儡女（くぐつめ）たちとの交流を記したものである。これを読んで、後の設問に答えなさい。

五月、花のころ、江口・神崎の君、①美濃の傀儡子（くぐつ）あつまりて、花参ら[ア]せしことありき。歌沙汰ありしに、「延寿（えんず）、『恋せば』と申す足柄をいまだうたはぬとて、御所に習ひまゐら[イ]せたきを、え申し出でぬと、これかれに聞かれ候ふ」と言ふと聞きしかども、聞き入れぬやうにてありしほどに、季時入道（すゑときにふだう）して申し出だしたり。「②いかでさることはあらむずるぞ。逆さまごとにてぞあらむ。我がためは名聞（みやうもん）にてこそあれど、③かたはらいたし。さはのあこ丸うたふめるは。それに習へかし」と返事に言ふ。延寿また申すやう、「いかさまにも習ひまゐらせて候はむこそ、この世のよろこびにては候はめ。あこ丸は、大進（だいしん）も小大進（こだいしん）もみな知り候はぬを、誰に習ひたるぞと④おぼつかなく候ふ。またこれらも、さ申せば、かたがたに」と申せば、「のちにこそ。これら居るときありて、聞きとられなむずるは。⑤ひとりあらむ時に、さらば教へむ」と言ひしを、「残りとどまりて習はむ」と[a]いたく言ひしかば、乙前（おとまへ）に「いたく言ふ。いかに」と語りしを、「さ申さば、教へさせたまへ

かし。さやうにいみじがり申さば、さやうの料にてこそ候へ」と乙前申ししかば、夜々二三夜ばかりにぞ[b]教へたりし。似[ウ]せぬところも、かたはらいたくおぼえて、え直さで、我、良くなるまでうたひてぞ教へし。その後、暇請（いとまこ）ひしに、疾くとてありしをよび返して、うたは[エ]せて聞きしに、「神妙なり」と言はれて、

四大声聞（しだいしやうもん）いかばかり　喜び身よりも余るらむ　われらは来世の仏ぞと　確かに聞きつる今日なれば

とうたひたりしかば、感に堪へずして、唐綾（からあや）の染付（そめつけ）なる二衣（ふたつぎぬ）を纏頭（てんとう）にしてき。⑥をりふしにつけては興がりておぼえき。

かやうに、男女これかれ、我に歌を習ふもの、その数ありしと言へど、みな好みさしつつ、始終習ふものなくて、あひ継ぐものなし。⑦としごろ好みたることに、たしかに伝へたる弟子のなき、口惜しきことなり。

（『梁塵秘抄口伝集』による）

（注）

○江口・神崎の君―江口や神崎に居た遊女。傀儡子同様、今様の歌い手。

○美濃の傀儡子―美濃国青墓の宿を拠点とした芸人。傀儡女。

○花参らせしこと―供花会（くげゑ）。仏前に花を供える法会。

○歌沙汰―今様に関する評判。

○延寿―傀儡女の名。

○『恋せば』と申す足柄―今様の秘曲「足柄」のうちの一つ。後白河院はこの曲を伝授されていた。
○御所―後白河院。
○季時入道―後白河院の近習。
○さはのあこ丸―傀儡女の名。
○大進、小大進―傀儡女の名。
○またこれらも―また延寿の仲間たちも。
○乙前―美濃出身の傀儡女で今様の名手。後白河院の今様の師。
○四大声聞いかばかり～今日なれば―仏に教えを受けた迦葉（かせふ）・須菩提（しゅぼだい）・迦旃延（かせんねん）・目連（もくれん）という四名の声聞（仏弟子）が、来世に仏になるという保証を授けられた喜びを歌った今様。
○唐綾の染付なる二衣―中国伝来の絹織物を染めて作った袿（うちき）を、二枚重ねたもの。
○纏頭―褒美として衣などを与えること。

問一 傍線部①「美濃」は、現在の県ではどこにあたるか。漢字で答えなさい。

問二 二重傍線部ア～エ「せ」のうち、使役の助動詞を一つ選んで、記号で答えなさい。

問三　傍線部②「いかでさることはあらむずるぞ。逆さまごとにてぞあらむ」について、次の問いに答えなさい。

（１）「さること」とは、どのようなことか。具体的に説明しなさい。

（２）「逆さまごとにてぞあらむ」とは、どういうことか。わかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部③「かたはらいたし」、④「おぼつかなく候ふ」を、それぞれ現代語訳しなさい。

③＝　　　　　　　　　　④＝

問五　傍線部⑤「ひとりあらむ時に、さらば教へむ」と言ったのはなぜか。その理由を説明しなさい。

問六　波線部ａ「いたく言ひしかば」、ｂ「教へたりし」の主語を、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　御所　　イ　季時入道　　ウ　さはのあこ丸

エ　延寿　　オ　乙前

ａ＝　　　ｂ＝

問七　傍線部⑥「をりふしにつけては興がりておぼえき」とあるが、後白河院は延寿のどのような行為について、このように思ったのか。「四大声聞いかばかり…」という今様の内容をふまえつつ、説明しなさい。

問八　傍線部⑦「としごろ好みたることに、たしかに伝へたる弟子のなき、口惜しきことなり」とあるが、後白河院は『梁塵秘抄口伝集』の中で、左記Ａ、Ｂのようにも述べている。傍線部⑦およびＡ、Ｂをふまえ、後白河院が本書を執筆した意図を説明しなさい。

Ａ　としごろかばかり嗜(たしな)み習ひたることを、誰にても伝へて、その流れなども後には言はればやと思へども、習ふ輩(ともがら)あれど、これを継ぎつぐべき弟子のなきこそ、遺恨のことにてあれ。

Ｂ　おほかた、詩を作り、和歌を詠み、手を書く輩は、書きとめつれば、末の世までも朽つることなし。声わざの悲しきことは、我が身隠れぬるのち、とどまることのなきなり。その故に、亡からむあとに人見よとて、いまだ世になき今様の口伝を作りおくところなり。

第三講　演習問題(3)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

さるほどに、姫君七歳と申す春の頃、桜の咲き乱れたるを御覧じ給へば、幼き者二人来たり遊びゐた[a]るを、三十ばかりの男、二十六七の女房来たりて、かの二人の童(わらんべ)を、男子(なんし)をば男抱き、女子(にょし)をば女抱きて帰りけり。姫君、御覧じて、「如何(いか)なる者ぞ」と御尋ねありければ、乳母(めのと)承り、「彼(か)の二人の童どものためには父母(ちちはは)にて候ふ」と言ひければ、姫君、聞こし召され、「①何として自らには父ばかりありて母のなきぞ」と仰(おほ)せければ、乳母、泣く泣く申しけ[b]るは、「君三歳の御時、[ア]儚(はかな)くなり給ひ候ふ」と申しければ、中将姫は聞こし召され、「今までも知らざりけるこそ悲しけれ」とて、急ぎ父の御前に参り給ひて、「②如何なる人にても母の形見と見奉り、慰みなん」と仰せければ、豊成(とよなり)聞こし召され、「あまりに姫申すに」とて、その夏の頃より俄(にはか)に北の方迎へ給ふ。姫君は真(まこと)の母のごとく露ほども背き給はず、従ひ傅(かしづ)き給ふ。

その後、中将姫は貴き御僧を招(せう)じ、称讃浄土(しようさん)御経を受けさせ給ひ、毎日に六巻づつ[イ]あそばし、母の後世菩提(ごせぼだい)を弔(とぶら)ひ給

へば、父豊成も御いとほしみは限りなし。北の方はこの姫を憎み給ひて、常には嘲（あざけ）り給ふ。豊成聞こし召し、「③継子（けいし）、継（けい）母（ぼ）の習ひぞ」と、ただ大方（おほかた）に思ひ給へり。北の方は中将姫を失はん謀（はかりごと）、明け暮れ案じ給ひけり。

姫君、十三にもならせ給へば、容顔美麗にして天下無双の人にて渡らせ給へば、帝（みかど）よりは后（きさき）に立ち給ふべき由、勅使、度々（たびたび）重なりければ、豊成も喜び給ひて、その御喜びは限りなし。A北の方は安（やす）からず思（おぼ）し召し、人を語らひて、冠（かうぶり）を着せ、束帯させ、中将姫の御局（つぼね）へ出で入（い）る由をさせ、豊成に仰せけるは、「姫君如何なる事も出で来ん時、『生（な）さぬ仲なれば』など仰せられ候ふな。姫君の御方を忍びて御覧候へ」と、様々讒奏（ざんそう）し給へば、豊成、ある日の暮れ方に、姫君の御方を北の方諸共（もろとも）に御覧ずれば、二十ばかりの男、直垂（ひたたれ）に折烏帽子（えぼし）着たるが罷（まか）り出でけり。

継母、豊成に仰せけるは、「日頃、妾（わらは）が申しつcるは空言（そらごと）か。女の身の習ひ、一人に契りを結ぶは世の常の事。ある時は冠を着、装束の人もあり。ある時は立烏帽子に直垂着たる人もあり。またある時は薄衣（うすぎぬ）引き被（かづ）きたる者もあり。見れば、法師なり。かやうに数多（あまた）に見（まみ）え給ふ事の僂さよ」と空泣きしつつ仰せければ、豊成聞こし召し、「人の持つまじきものは女子なり。母最期の時、④強（あなが）ちにいとほしみをなしつるほどに、如何にもして世にあらせんと思ひつるに、口惜しき振舞ひしけ

るこそ悲しけれ。明日(みやうにち)にもなるならば、この事漏れ聞こえ、禁中の物笑ひは豊成が女子にはしかじ」と思し召し、武士(もののふ)を召し、「汝(なんじ)、紀伊国有田郡雲雀山(ひばりやま)といふ所にてB頭(かうべ)を刎(は)ねよ。後の供養(きやうやう)をばよくよくせよ」と仰せければ、武士承り、「三代相恩の主君の仰せを背き申すに及ばず」とて、姫君を具し奉り、彼の山の奥に御供申す。大臣殿の御定の趣、詳しく申したりければ、姫君、聞こし召し、「C我、前世の宿業拙(つたな)くして、人の偽りにより汝が手に掛かり、消えなん事力及ばず。さりながら、少しの暇(いとま)を得させよ。その故は、我七歳の頃より称讃浄土御経を受け奉り、毎日母尊霊(そんれい)に手向(たむ)け奉り、今日はいまだ読まず。且(か)つうは父の御祈りのため、且つうは母亡魂(ばうこん)、出離生死(しゆつりしやうじ)・頓証菩提(とんしようぼだい)の御ため、または、自らが剣(つるぎ)の先に掛かりなば、修羅(しゆら)の苦しみをも免れ、浄土の道の導(しるべ)ともせん」と仰せければ、D武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける。

（「中将姫本地」による）

注
受けさせ給ひ……教えを受けてよくお守りなさって。
讒奏し……人をおとしいれようとして、悪口を申し上げ。
頓証菩提……すみやかに覚りを得ること。

問一　二重傍線部ａ〜ｃの「る」について、それぞれ文法的に説明せよ。

ａ＝

ｂ＝

ｃ＝

問二　波線部ア「儚くなり」、イ「あそばし」は、ここではどのような意味か。現代語の終止形でそれぞれ答えよ。

ア＝

イ＝

問三　傍線部①〜④を、必要な語句を補いながら、わかりやすく現代語訳せよ。

①＝

②＝

③＝

④＝

問四　波線部Aに「北の方は安からず思し召し、人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」とある。

1　北の方が「安からず思し召し」たのはなぜか。簡潔に説明せよ。

2　何のために、「人を語らひて、冠を着せ、束帯させ、中将姫の御局へ出で入る由をさせ」たのか。簡潔に説明せよ。

問五　波線部Bに「頭を刎ねよ」とある。豊成が姫を亡き者にしようとしたのはなぜか。六十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

問六　波線部Cに「我、前世の宿業拙くして、人の偽りにより汝が手に掛かり、消えなん事力及ばず」とある。

1　「人の偽り」とは何か。「人」が指す人物を明記して、具体的に説明せよ。

2　姫君は、「消えなん事力及ばず」とこの事態を受け入れる。それはなぜか。「前世の宿業」を解説しつつ、五十字以内で説明せよ（句読点を含む）。

問七　波線部Ｄに「武士、岩木にあらざれば、しばらく時をぞ移しける」とある。

1　「しばらく時をぞ移しける」とは、姫が何をする時間を取ったのか。具体的に説明せよ。

2　ここで、武士は何に心を動かされたのか。四十字以内で答えよ（句読点を含む）。

第四講　演習問題(4)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

きさらぎ十日ばかり、※越(こし)の前(さき)の国板取(いたとり)といふあたりを旅行しけるに、雪いと高し。「この雪いかばかりの高さは侍る」と問ふに、「※十丈(とたけ)あまりなり」といふ。(a)いかにしてさは量(はか)りしれりとおもふに、常見る大木(おほき)の末(うれ)が、真柴(ましば)などみるばかりに、雪のつもれるうへに余りて侍るをもて、そればかりの丈(たけ)なりとはいふなり。

雪はおもしろき物にて、松の小枝(さえだ)にかかりたるあかつき、小竹群(しののめ)のうら葉にふりしく夕ぐれなどは、花にもまさりておもほゆるを、かくつもりたる山路(やまぢ)にては、人の命(いのち)をもとるべきものは雪なり。かまへてきさらぎばかりは、春のきざし下にめぐみて、かのつもれる雪は氷りながら土をかいはなれてくえおつる。これを雪国には雪なだりといふなり。さる時は麓(ふもと)の※家村(いへむら)をうもらし、柱梁(はしらうつばり)などをさへうちたふし、あまたの人、これにうたれて死ぬること、年々にあ①なりといふ。さる(b)かしこき事をききしる人は、Ⅰやどりをばまだきに出て、氷の消ゆまじき時にあゆみ、日のさしのぼりてあたたけ

くなれば、さる高山の※常陰なら②ぬ所をもとめて、昼より先やどりを乞ふなり。またさるやどりをこふにも、大路の雪は軒よりも高ければ、遥かに人屋を見下して大声を出し、「やどりせ③む。借し給へ」といへば、Ⅱ黄泉下べより打ちあふぎて、「道の伴ひはいくたりにてさぶらふ」などいふを、「見給ふばかりの伴ひなり。借代はいくら参らすべき」と、又大声にいへば、「かかる雪の中の住居して侍るに、(c)何まゐらせむものもなし。よきほどにしたまへ」といふさへかすかに聞こゆ。さて谷の底にはひ下るばかりに家の外に下りて、先火を乞ふにぞ、真柴はぬれにぬれて火つかず。烟は立ちこめて、いぶせき事いふかぎりなし。

さて、※落間のすみに雁を三つと真鴨を二つなむ、※かたまにふせてかひおけり。「こはかかる旅人にたうべさせむかまへ④にや」といへば、「Ⅲさることにはあらず。彼らはよく時をしりてはべる鳥なれども、西南の国のはやく春づきし年は、時をたがへて、まだきに北国をさしてかへり来る故に、翼ありて空はゆけども、さすがに※八重山の雪のみを見つつ飛びこゆるに、とく下りて物はまむとすれども、野も岡も川もひた白にて、何はまむ所もなければ、飛びかへらむとしつつ、空にいざよふ時、かの雪国にはべる雪吹といふあらしの吹出て侍るに、天路まどひて、少しも人家のちかからむ所にとびくだりて

やすらふなり。日頃（ひごろ）は人をおそれて高く飛鳥（とぶとり）なれども、さるときは其人（そのひと）をおもひ頼みて、かくちかづくがかなしく侍り。これも十日ばかり先（さき）のあらしに、我家（わぎへ）の外（と）にくだり⑤にけり。この隣（となり）にも、先の家にも、三四五（みついつ）つは落ちて侍るを、みな我ごとくにして、稲をはませてかひてさむらふ。(d)やうやうのどけくならば、隣なるも先のも、これなるも、ともにして放（はなち）やらむと申しあはせてさむらふ」とかたる。Ⅳよき心かなとはおぼえける。

（建部綾足『折々草』より）

※注

越の前の国板取＝現在の福井県南条郡南越前町板取。

十丈あまり＝三〇メートル余り。板取近辺は豪雪地帯。

家村＝家群。集落の意。

常陰＝いつも日陰になっていて日の当たらない所。

落間＝土間。

かたま＝竹籠。

八重山＝幾重にも重なり合った山々。

問一 波線部(a)～(d)を現代語に訳しなさい。

(a)＝

(b)＝

(c)＝

(d)＝

問二 傍線部①～⑤の助動詞の意味を次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

A 完了　B 伝聞　C 意志
D 断定　E 尊敬　F 打消

①＝　②＝　③＝
④＝　⑤＝

問三　傍線部Ⅰについて、そのようにする理由を簡潔に述べなさい。

問四　傍線部Ⅱについて、何が、どのような状態であることを「黄泉（よもつ）下べ」に喩（たと）えているのか。簡潔に説明しなさい。

問五　傍線部Ⅲはどういうことか。「さること」の内容を明らかにして、三〇字以内で説明しなさい（句読点も字数に含める）。

問六　傍線部Ⅳについて、なぜこのように思ったのか。本文の内容に即して六〇字以内で説明しなさい（句読点も字数に含める）。

模範解答

第一講

〔模範解答〕

問一　1　どんなことであってもご遠慮なくお話しくださいませ。
　6　いつものように露殿が泊まりなさったが、どうして物音を立てなさらないのか。

問二　両親に先立たれ、生活に困窮し、身を売り遊女となっていること。（三十字）

問三　エ

問四　かの君が、自分と同じ思いでいてくれているか不安な気持ち。（二十八字）

問五　かの君が露殿と夜逃げすること。（十五字）

問六　a　ず・エ　b　き・エ　c　ぬ・ア　d　む・オ　e　つ・オ

問七　A　イ　B　ア　C　エ　D　イ

問八　A　井原西鶴　B　本居宣長

〔現代語訳〕

ある時かの君が、起きているでもなく寝ているでもない様子で思いに沈んで、こぼれかかる頭の左右側面の髪のはずれに伝う涙は貫く玉のようであり、霜を帯びた女郎花の、下葉がしおれているような風情で、いかにもぼんやりと元気をなくしていらっしゃるので、露殿はご覧になって、「どうしてそのように機嫌をそこねていらっしゃるのか。何かお気に入らないことがございますか、私にお恨みでもおありですか、どんなことであってもご遠慮なくお話しくださいませ。少しもお心にそむくことはいたさないようにしましょう」とおっしゃると、かの君は涙を拭いなさって、「お恥ずかしいことでございますが、この上は何を隠しましょうか、いや、隠さず申し上げます。私の父母は大阪にいらっしゃいましたが、慶長の戦の際に、父は主君のために命を落とされ、母上は筑紫とかいうところで亡くなりなさったので、私は孤児となって、あちらこちらとさすらい、

人買いの手に渡り、今この女郎屋に売られてきて、このように遊女の身の上になっているのでございます。壁に耳あり、岩が物言う（などと諺にあるように、秘密が漏れやすい）この世の習いで、天知る地知る我知る人知るで、あれは誰それの娘であるが、父母に先立たれ、仕方なく身を売って、遊女として生きているあきれたことだと、世間の嘲りがございます。私はもう遊女となって、浮いた稼業をしている身であるので、どう嘲られてもかまいませんが、あの世にいらっしゃる父母の、悪い評判を流す情けなさ、悲しさ面目なさは、言いようもありませんので、ああ、私を夜に紛れて盗み出して、どこへでも連れて行ってくださいませ。あなただけでも一緒ならば、虎が臥す野辺も、鯨が寄ってくる浦も、どんなに岩や木が多い谷間であっても、どうして住みづらいことがありましょうか、いえ、（どんな場所でも）つらくはありません」と、胸の内をこまごまと訴えなさって、美しい両眼から、涙をはらはらと落としなさると、露殿はお聞きになって、「うれしいことをお聞きしたものだなあ。前々から（私も）そうしたいと思っておりましたが、あなたの胸の内はどうであろうかとためらっておりまして、今まで（連れて逃げることが）遅くなってしまいました。さあそうならば決心なさいませ。しかも今夜は人の声もせず、雑用係の幼女も監視役の老女も辺りに見えず、よい機会でございますから、さあいらっしゃい」と言って、取る物も取りあえず（かの君を）盗み、背負って逃げ出して、武蔵野を目指して逃げて行きなさる。

たいそう暗く、行く先が見えないので、夜がほのぼのと明けるまで、武蔵野をさまよい歩きなさる。こうして夜が明ける頃に、（女郎屋の）主人の男が、「昨夜はいつものように露殿が泊まりなさったが、どうして物音を立てなさらないのか」と言って、（部屋へ）行って見ると、女もいない。もちろん露殿もいらっしゃらなかったので、「ああ大変だ」と思って、弓胡簶を背負って追いかけた。道を行く人に、「これこれの者を見なかったか」と尋ねると、「それそれ」と答える。「それならば」と言って、武蔵野を目指して追いかけて行くのは（二人にとって）厄介なことである。

第二講

〈模範解答〉

問一　岐阜（県）

問二　エ

問三　（1）後白河院が今様の歌い手である延寿に、今様の秘曲の「足柄」のうちの一つを教えること。

（2）ただの今様の愛好者である後白河院が、本職である傀儡女に今様を教えるのは立場が逆でおかしいということ。

問四　③　きまりが悪い

④　不審でございます

問五　教えることに本当は気乗りがしていないが、それなりの返答をしてその場を早く収拾させたいと思ったから。

問六　a　エ　　b　ア

問七　仏前に花を供える法会がきっかけで、後白河院から秘曲を教えてもらえた喜びを、仏に教えを受けた仏弟子が、来世に仏になるという保証を授けられた喜びを歌った今様で表した、当意即妙な行為。

問八　長年、今様を好んできたが、きちんと後世に伝えていってくれる弟子がおらず、自分が死ねば、今様は歌なので声の技芸だから形に残すこともできず、自分の死後も伝わるものを書き残したいという意図。

〈現代語訳〉

旧暦五月、花の頃、江口や神崎に居た遊女や、美濃の傀儡女が集まって、供花会〔＝仏前に花を差し上げること〕があった。（その時に）今様に関する評判があった時に、「延寿が、『恋せば』と申します今様の秘曲の「足柄」のうちの一つをまだ習得していないといって、御所〔＝後白河院〕に習い申し上げたいが、申し出ることができないと、この人あの人から耳に入りま

す」と言うのを（私〔＝後白河院〕は）聞いたが、聞き入れない様子でいたところ、（延寿がそのことを）季時入道〔＝後白河院の近臣〕を介して申し出てきた。（私は）「どうしてそんなことがあるだろうか。逆さまのことであるだろう。私にとっては名誉であるが、きまりが悪い。さはのあこ丸が習得しているようだよ。その人に習えよ」と返事に言う。延寿がまた申すことには、「なんとかして（私は後白河院に）習い申し上げますなら、この世の（一番の）喜びでございましょう。あこ丸は、いずれにしても（後白河院に習いたいのです）」と申し上げるので、（私が）「後で（教えよう）」。この者たちがいる時に（秘曲の伝授が）あっては、聞き取られてしまうだろうよ。（延寿が）一人でいるような時に、それならば教えよう」と言ったところ、（延寿は）「居残って習おう」と熱心に言ったので、（私の今様の師匠である）乙前に「（延寿が）熱心に言う。どうしようか」と話したところ、「そんなに申し上げるのなら、お教えなさいませ。そのようにひどく習いたがって申し上げるなら、そのような覚悟なのです」と乙前が申し上げたので、（私は延寿に）夜ごと二、三夜くらいで教えた。（延寿が私と）同じようにできない箇所も、（素人の私が本職の人に教えることは）きまりが悪く思われて、直すことができないで、私は延寿自身が（理解して）、良くなるまで歌って教えた。その後、（延寿が）別れの挨拶をしたので、すぐに（退出しよう）としていたのを（私は）呼び戻して、（「足柄」を）歌わせて聞いた時に、「すばらしい」と（私に）言われて、

四大声聞いかばかり…＝四名の仏弟子はどれほど、喜びが身にも余っているだろう、自分たちは来世に仏になるのだと、しっかりと聞いた今日であるのだから。

と（延寿が）歌ったので、（私は）感動を押さえられなくて、唐綾の染付の二衣を（延寿に与える）褒美として与えた。時宜にかなって興趣が深く感じられると思われた。

このように、男女のこの人もあの人も、私に（今様の）歌を習う者は、その数が多くあったと言っても、みんな興味が途中で薄れて、一貫して習う者はいなくて、後を継ぐ者はいない。長年愛好してきたことに、しっかりと伝えている弟子がいないのが、残念なことである。

第三講

〔模範解答〕

問一 a 存続の助動詞「たり」の連体形の一部
b 過去の助動詞「けり」の連体形の一部
c 完了の助動詞「つ」の連体形の一部

問二 A 亡くなる　B 読経なさる

問三 ① どうして私には父親だけがいて母親はいないのだ
② どんな人であっても新しい母親を亡くなった母親の代わりと思い申し上げ
③ 北の方が姫君のことを憎んでいることは、継子と、継母の関係ではよくあることだ
④ 姫君のことをひたすら不憫に思う様子を見せたので

問四 1 憎い継子の姫君が天皇の后になるかもしれないことが腹立たしいから。
2 姫君には既に通っている男がいると豊成に思わせ、入内を破断にし、姫君を陥れるため。

問五 複数の男が姫君に通っていると思い込み、大事に育ててきた娘に裏切られたと思い、また、宮中で嘲笑されるのが嫌だったから。（五十八字）

問六 1 北の方が、複数の男が姫君の部屋に通っていると言い、豊成をだましたこと。
2 人の運命は前世の行いによって定まっており、自分の前世の悪行が原因で、逃れられない運命と考えたから。（四十九字）

問七 1 日課としていた称讃浄土御経を、両親や自分のために読経する時間
2 無実にも関わらず、死を受け入れ、両親の為に読経する姫君の信心深さと孝行の気持ち。（四十字）

〈現代語訳〉

そうするうちに、姫君〔＝中将姫〕が七歳と申す春の頃、桜が咲き乱れているのをご覧になると、幼い者が二人来て遊んでいるのを、三十歳くらいの男と、二十六、七歳の女がやって来て、その二人の子どもを、男の子を男が抱き、女の子を女が抱いて帰った。姫君が、ご覧になって、「どういう者だ」と尋ねなさったので、乳母がお聞きして、「あの二人の子どもたちにとっては父母でございます」と言ったところ、姫君は、お聞きになり、「どうして私には父親だけがいて母親がいないのだ」とおっしゃったので、乳母が、泣きながら申し上げたことは、「姫君が三歳のご時分に、お亡くなりになっています」と申し上げたところ、中将姫はお聞きになり、「今までも知らなかったのが悲しい」と言って、急いで父の御前に参上なさって、「どのような人であっても（新しい母親を）亡くなった母親の代わりと思い申し上げ、きっと心が慰められるだろう」とおっしゃったので、豊成〔＝中将姫の父〕はお聞きになり、「あまりに姫が申すので」ということで、その夏の頃から突然北の方を迎えなさる。姫君は本当の母のように（北の方に）少しばかりも背きなさらず、言うことを聞いて仕えなさる。

その後、中将姫は尊いお坊様を招き、称讃浄土御経の教えを受けてよくお守りなさって、毎日六巻ずつ読経なさり、実母の後世菩提を弔いなさるので、父の豊成も（中将姫を）不憫にお思いになることこの上ない。北の方はこの姫を憎みなさって、いつも嘲笑なさる。豊成はお聞きになり、「（北の方が姫君を憎むことは）継子と、継母の（関係では）よくあることだ」と、ただ普通のことだと思いなさっていた。北の方は中将姫を亡き者にしようとする企みを、いつも考えなさった。

姫君が、十三歳にもなりなさると、顔立ちはとても美しくて世の中に並びなき人でいらっしゃるので、天皇からは后に立ちなされとのこと（を伝えに）、勅使が、何度も回数を重ねたので、豊成も喜びなさって、そのお喜びはこの上ない。北の方は心穏やかでなく思いなさり、人を説いて協力させて、冠をかぶらせ、束帯を身に着けさせ、中将殿のお部屋へ出入りするふりをさせ、豊成におっしゃったことは、「姫君にどのようなことが起こったとしてもその時、『血のつながらない親子だから』などとおっしゃいますな。姫君のお部屋をこっそりご覧なさいませ」と、いろいろ人〔＝姫君〕をおとしいれようとして、悪口を申し上げなさるので、豊成が、ある日の日暮れ頃に、姫君のお部屋を北の方と一緒にご覧になると、二十歳くらいの男で、直垂姿に折烏帽子をかぶっている男が出て参った。

継母〔＝北の方〕が、豊成におっしゃったことは、「数日間、私が申し上げたことは偽りか。女の身の道理として、一人に

夫婦の約束をするのは世間の常識。ある時は冠をかぶり、束帯姿の人もいる。ある時は立烏帽子に直垂を着ている人もいる。またある時は薄い着物を頭からかぶっている者もいる。見ると、法師である。このようにたくさん（の男性）とお会いなさることの浅はかさよ」と嘘泣きをしながらおっしゃったので、豊成はお聞きになり、「人が持つべきでないものは女の子だ。（姫君の）実母が臨終の時、（姫君を）ひたすら不憫に思う様子を見せたので、どうにかして人に認められるように育て上げようと思ったのに、残念な振る舞いをしたことが悲しい。明日にもなったら、このことは世間に広まり、宮中の笑い種は私豊成の娘が一番になるだろう」とお思いになり、武士をお呼びになり、「お前が、紀伊国有田郡雲雀山という所で（姫君の）首を刎ねろ。死後の供養をしっかりとしろ」とおっしゃったので、武士は承知申し上げ、「祖父以来三代にわたって恩を受けた主君のご命令に背き申し上げることはできない」といって、姫君をお連れ申し上げ、その山の奥にお供申し上げる。大臣殿〔＝豊成〕のご命令の趣旨を、（武士が姫君に）詳しく申し上げたところ、姫君は、お聞きになり、「私は、前世からの因縁が劣っていて、人の偽りによってお前の手にかかり、命を失ってしまうことは仕方がない。そうではあるが、少しの時間を与えよ。そのわけは、私は七歳の頃から称讃浄土御経の教えを受け申し上げ、毎日実母の御霊に（読経を）手向け申し上げ、（しかし）今日はまだ読経していない。一方では父のお祈りのため、一方では実母の亡魂の、出離生死〔＝悟りを開いて生死の苦から脱すること〕・頓証菩提〔＝すみやかに悟りを得ること〕のため、さらには、私が剣の先にかかったならば、争いの苦しみをも逃れ、極楽往生の導きともしたい」とおっしゃったところ、武士は（感情がない）岩や木ではないので、しばらく時間を置いた。

第四講

〈模範解答〉

問一　（a）どのようにして雪の高さを測って知ったのか
（b）雪崩の恐ろしさを聞き知っている人
（c）何も差し上げる食べ物もない
（d）次第に天候が穏やかになったら

問二　① B　② F　③ C　④ D　⑤ A

問三　日が昇り暖かくなると雪崩発生の可能性があり、雪崩に巻き込まれないようにするため

問四　家が、高く積もっている雪の上から見ると、はるか下にある状態。

問五　雁や真鴨を旅人に供するために飼っているのではないということ。（三〇字）

問六　吹雪で困っている鳥をみんなで助け、春になれば、その鳥を一緒に放そうとしている雪国に住む人々の優しさに感動したから。（五十七字）

〈現代語訳〉

二月十日頃、越前の国板取という辺りを旅していたところ、雪がとても高く降り積もっている。「この雪はどれくらいの高さがありますか」と問うと、「三〇メートル余りだ」と言う。どのようにしてそれを測って知ったのかと思うが、いつも見ている大木の梢が、小枝などを見るくらいに、雪の積もった上に出ていますことによって、それくらいの高さだと言うのである。雪はおもしろいもので、松の小枝に降りかかっている暁や、小竹群の枝の先端の葉に降りしきる夕暮れなどは、花（の美しさ）にも勝っているように思われるが、このように降り積もった山道では、人の命も取ることができるのは雪である。心すべきは二月頃は、春の兆しが（雪の）下で萌して、この積もった雪は凍ったまま土を離れて崩れ落ちる。これを雪国では雪崩という

のである。そういう時は麓の家群を埋もれさせ、柱や（柱の上に渡している）梁などまでも打ち倒し、大勢の人が、これに打たれて死ぬことが、毎年あるそうだという。

そのような（雪崩の）恐ろしさを聞き知っている人は、家を早くに出て、氷が消えないうちに歩き、日が昇って暖かくなると、しかるべき高い山のいつも日陰になっていて日の当たらない所ではない所を求めて、昼間からまず宿を乞うのである。またそのような宿を乞うときも、大通りの雪は軒よりも高いので、はるかに家を見下ろして大声を出し、「宿を借りたい。お貸しください」と言うと、冥界のような地底から仰いで、「道のお連れは何人ですか」など言うので、「ご覧になるだけの連れです。宿泊代はいくら差し上げたらよいか」と、また大声で言うと、「このような雪の中の住まいですから、何も差し上げる食べ物もない。よしなにしてください」と言うのまでもかすかに聞こえる。そうして谷底に這って下るように家の外に下りて、まず火をお願いすると、（焚き付け用の）小枝は濡れていて火がつかない。煙が立ち込めて、不快なことこの上ない。

さて、土間の隅に雁を三羽と真鴨を二羽、竹籠を伏せて飼っている。「これはこのような旅人に食べさせようとして備えたものですか」と言うと、「そういうことではない。これらはよく季節を知っております鳥ですが、西南の国が早く春になった年は、季節を間違えて、早くに北国を目指して帰って来るので、翼があって空を飛ぶけれど、そうはいってもやはり幾重にも重なり合った山々の雪ばかりを見続けて飛んで越えてくるので、すぐに下りて何かを食べようとするけれど、野も丘も川も真っ白で、何も食べるところもないので、飛んで帰ろうとしては、空をただよっている時、例の雪国にございます吹雪という嵐が吹き出しまして、空の道の方向を失って、少しでも人家の近くに飛び下って休むのです。日ごろは人を畏れて高く飛ぶ鳥であるが、そういう時は人を頼りに思って、このように近づくのが愛しいのです。この鳥も十日ほど前の嵐の時に、我が家の外に下りてきた。この隣にも、前の家にも、三、四、五羽は落ちてきましたのを、みな私のようにして、稲を食べさせて飼っています。次第に天候が穏やかになったら、隣でも前の家も、私のところでも、ともに放してやろうと申し合わせています」と語る。よい心だなあと思った。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。